クローズアップ道徳科

2021 下半期現在の「特別の教科 道徳」の課題（1）　2021.11

後藤　忠 2023.05.03 補訂

緊急事態宣言は解除されたが･･･

長かった第 5 波新型コロナウイルス感染症まん延防止等特別措置、及び緊急事態宣言は 9 月末にようやく解除された。

しかし、手放しで喜んではいけない空気は依然として残っている。何度も繰り返された宣言/解除によってコロナ禍の完全終息に疑心暗鬼になってしまっているからだろう。「感染者数は今が**底**」という言葉がまことしやかに飛び交っている昨今である。

それにしても、この 2 年近くで社会・経済活動、雇用、教育、人とのコミュニケーション、体力・健康の保持などが著しく停滞し、その落ち込みは惨たんたる状態である。

学校の道徳教育への取り組み意欲の低下も同様で、ある教育雑誌に「**学校の課題**は今や道徳から ICT へ」とあった。また、某道徳月刊誌の売り上げ部数はひと頃に比べて大幅に減少していると聞く。（しかし、私が見る限り、学校の道徳教育の課題は達成されているとは到底思えないが。）

先の雑誌は「学校の**課題**は」と書くべきではなく、「学校の**関心**は」と書くべきだろう。

いずれにしても、私が密かに恐れていた嫌な予感が的中し、現実になっている。

「特別の教科 道徳」が誕生した頃のあの熱気はやはり本物ではなく、**にわか熱**だったということである。しかもその熱気は「通知表や指導要録の評価欄をどう書けばよいか」という類(たぐ)いの熱で、評価の意味や意義には全く興味関心が向かなかった。「評価の書き方が一応分かったからもういい」と。

そんな評価ならむしろやらない方がましである。評価する弊害の方がはるかに大きい。

そもそも、「評価しなければならないから授業をする」という全く本末が転倒した授業観ではこういう結末も不思議はないが、教師として何とも情けない話である。

「これからは道徳重視だ」と言っていたのに、これでは依然として軽視ではないか。そもそも道徳重視など鼻から頭にはなく、面倒くさいと思っていただけではないのか。

我々教師の本来的使命は何か、教職に生きるとは何にどう生きることを言うのか、そのことを忘れてはならない。

我が国の教育は、教育基本法第 1 条に示されているとおり、**人格の完成を目指し**て行われており、その人格の基盤が道徳性である。その道徳性を育てることが教師の使命であり、その要となるのが道徳科の指導である。

つまり、いかに時代や社会が変化しようとも、学校教育で重視しなければならないものは道徳教育であり、これは 1 教科、1 教育課題とは根本的に質が異なるものだと思う。

こうした信念や意思をもって学校教育と係わり、学校教育を担当し、学校教育を推進する人がもっともっと増えて欲しい。

「特別の教科 道徳」に直接・間接に係わる全ての人が、それぞれの立場において受け止めなければならない課題について以下に述べる。

学級担任は

✧　**主体性をもって道徳授業を行おう**

そのためには「自分で考えて授業をする」ことである。教師用指導書通りや赤本丸なぞりの授業は何ら主体性のない授業と言わなければならない。

笑えない笑話がある。教師用指導書通りに発問して、そこに例示されている回答通りに子どもから反応が返ってこなかったら、「今日の授業は失敗だった」と自己評価する教師がいるという。どこの誰が書いたか分からない指導例を「教師用指導書に書いてあるから」と自分で考えもしないで鵜呑みにし、自信を喪失している。その素直さと滑稽さが何とも歯がゆい。

教師は自分で考えて授業をしないと指導力(授業力)は向上しないし、児童生徒の道徳性は育たない。指導力を身に付けるには本気で勉強する以外に道はない。

しかし、教師の日々の仕事は多岐にわたり、しかもその一つ一つは重い。週 1 時間の道徳科ばかりに時間と労力を割くわけにはいかない。

だから年に 1 回でいい、徹底的に教材研究をし、自分で考えた道徳授業を行うことである。（東京都なら、道徳授業地区公開講座が絶好の機会になるだろう。）

それを 5 年続ければ相当力が付くはずである。10 年続ければ道徳科の指導の本質を会得するに違いない。0 から出発する謙虚さと覚悟をもって取り組むのが成長の鍵だと思う。焦ることはない、今より少し指導力が向上すればそれでよいのだ。

✧　道徳科の目的、目標をいつも意識しよう

役割演技などの表現活動、話し合い活動、書く活動などの学習活動、ICT 端末タブレットの活用、評価などを目的化してはならない。

道徳科で何を育てるのか、道徳科で子どもは何を身に付けるのかといった目的を常に意識することである。そして、「なぜその学習活動を取り入れるのか」、「どんな指導効果を期待してその指導法を用いるのか」を常に考えることである。このことは、特に道徳の授業研究に積極的に取り組んでいる教師に言いたいことである。

効果的な指導法は、授業で見せる**子どもが学ぶ姿**の中にある。

いや、そんなことよりもっと大切なことがある。それは、「道徳授業には授業者の人生が全て顕れる」ということである。また、そういう授業をしないと子どもの心には響かないのである。

だから道徳授業は子どもが信頼し、敬愛する学級担任が行わなければならないのだ。

授業の上手下手など大したことではない、枝葉の問題である。

にもかかわらず、上手な授業がしたい、スムーズでスマートな授業がしたい、失敗したくないと思ってしまうのは人間の弱さであり、煩悩だ。

下手でもいい、失敗してもいい。教師が人生をさらけ出して行う授業が感動と感化の道徳授業を生むのだ。

校長は

✧　道徳教育のビジョンを高く掲げよ

校務を司り、所属職員を監督する校長の責任は極めて重い。とりわけ、児童生徒の人格の完成を目指す道徳教育の充実は、校長の職務における最重要課題であり、その充実は校長の双肩に懸かっている。

校長の教育ビジョンには校長の道徳教育充実への熱い思いと強い決意が込められなければならない。しかもその思いは道徳教育に対する正しい理解と知識に裏付けられたものでなければならない。

しかし、私がそうであったように、現職の校長の多くは、自らの少年少女時代も含め、戦後道徳教育の不毛時代を生き、その影響をもろに受けてきたことも事実である。

その後遺症もあって、突然「道徳教育重視」と言われても、正しい道徳教育の具体的なイメージがつかめない、分からない、あるいは道徳教育を誤解している校長は少なくないことも事実である。脚下照顧、まず校長自ら始めなければならない。

校長が本気になれば教職員も本気になり、児童生徒の道徳性は着実に育つ。

知恵ある者は知恵を出せ。知恵なき者は汗を出せ。汗なき者は去れ。

教科書会社は

✧　「教材は道徳科の命だ」と深く自覚せよ

このことを強く、深く自覚して教科書づくりに

取り組んでいただきたい。

前2回の教科書採択では、採択する側の教育委員会や学校に道徳科の特質を理解し、教材の良し悪しを見抜き、教材の扱いを知る人がおらず、ただ漠然と曖昧な基準で教科書を選んだ地区が多かったのではないかと推測するが、採択したその教科書で道徳授業を続けていく内に教材の良し悪しが次第に分かってきたという話をよく聞くようになった。

いろいろある話の中の一つが、いわゆる有名教材（定番教材）の改作の酷(ひど)さである。

教科書の紙幅の都合で改作はやむを得ないことだが、改作するならもっと上手に改作しなければならない。中には「素晴らしい！」と感嘆する程のものもあるが、多くは腕の悪い料理人が高級食材を雑にさばいた料理のように、原作のよさが台無しになっている教材が目に付く。これでは原作者が泣くだろう。（原作者はそんな改作をよく許可したものだと不思議に思う。）

この他にも酷い話はあるが、教科書編集に携わる人達は教材に対する愛と、確固たる信念をもって、責任ある編集に努めていただきたい。

本当かどうか分からないが、某教科書会社ではあまり力があるとは思えない編集委員を集めて、その会議に教材作成や教材選定を丸投げしていると聞く。そして、委員の意見が別れるとその教材の採否を多数決で決めているという。もはや絶句である。この話がもし本当なら、小学校の学級会にも劣る話で、フェイク・ニュースであることを祈る。

また、程度の差はあるが各教科書に個性（その社らしいよさ）というものがあまり感じられない。

これでは採択する側が困る。地域・学校の道徳教育上の課題に合った教科書を選ぼうにも選びようがない。「何となくこっちの教科書がいいんじゃないか」とか、「付録が多いからこっちがいい」とか、そんな理由で教科書を選んでいる実態もあるのではないか。

よい教材には必ず買い手が付く。よくない教材をつかまされたら2度と買わない。

企業だから大きなリスクは避けたい気持ちは分かるが、会社の誇りと創業の理念に懸けて、もっと自社の教科書の「品質」と「特色」を打ち出してもよいのではないかと思う。

✧　多くの教師が教師用指導書や赤刷りを信じて授業をしている実態を強く認識せよ

残念ながら、今の学校の実態はこうであることを認めなければならない。

だからこそ、教師用指導書や赤刷り、学習の手引きなどに「間違った指導例」や「受けねらいの指導法」などを載せてはいけないのだ。

永年の授業研究や授業検証によってNGだと証明されている初歩的な「誤り」を平然と載せているお粗末は一体どうして起きるか？指導書の酷い指導案は誰が書いたか明記すべきである。それとともに、初歩的なミスをきちんとチェックする機能を社内に整えるべきだと思う。

「教師用指導書は見るな。参考にするな」と言わなければならないことは本当に残念である。

高価な教師用指導書が教育委員会を通じて学校に配られ、道徳授業で使用されることによって撒き散らされる弊害と被害は甚大であることをもっと自覚していただきたいと思う。

追ってアップする**「特別の教科 道徳」の課題（2）**では、**道徳教育研究団体、教員養成大学、教育委員会及び教員研修機関、国の行政機関、教育関係図書出版業界、保護者**など、**（1）**で取り上げなかった課題について述べる。